

朝倉城跡Ⅱ

― 第3次調査報告書 ―

2022.11

高知大学人文社会科学部考古学研究室

朝倉城跡Ⅱ

— 第3次調査報告書 —

2022.11

高知大学人文社会科学部考古学研究室

例言

1. 本報告書は、高知県高知市朝倉丁109・110・141番地に位置する県史跡・朝倉城跡に対して2017(平成27)年9月14日から24日まで実施した第3次調査の報告書である。
2. 本調査は国立大学法人高知大学教育研究部人文社会科学系(担当:宮里修)が実施した。本調査はまた高知市史編さん事業の一環でもあり高知市から支援を受けた。
3. 調査の体制は以下の通りである。
調査主体:高知市史編さん委員会考古部会、高知大学教育研究部人文社会科学系
調査担当:高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・講師(当時)宮里修
4. 測量基準杭は第1次調査で設定したものをを使用した。
5. 現地調査および整理作業には以下の諸氏が参加した。
宮里修(高知大学人文社会科学部准教授)、稲垣直也、飯田悠衣、亀田さくら、登綾音(3(14)期生)、鎌田真生、松下彰宏(4(15)期生)、伊藤真由・金田将成・藤田京佑・宮地麻未(5(16)期生)、平松里緒(6(17)期生)
6. 本報告書の執筆・編集は宮里修が担当した。
7. 本報告書の写真は宮里修が撮影した。
8. 調査の過程で以下の諸氏・機関からご助力を賜りました。記して感謝いたします。
甲斐友太、梶原瑞司、楠瀬慶太、柴田圭子、下木千佳、筒井秀一、濱田光、弘田五郎、松井喬行、松田直則、三輪絃士、目良裕昭、山崎美希、吉成承三、朝倉城跡保存会、朝倉城山城八幡宮、高知市教育委員会権・文化財課、高知県教育委員会文化財課、高知県埋蔵文化財センター

凡例

【構成】

1. 「調査の経緯・経過(第Ⅰ章)」「発掘調査(第Ⅱ章)」「詰ノ段の調査成果について(第Ⅲ章)」の順に調査内容を報告した。末尾に「参考・引用文献」を掲載した。
2. 「写真図版」は巻末に掲載した。

【記述】

1. 現地調査で設定した4m間隔のグリッドを位置表示の基準にした。グリッドは南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を割り当て、北西角の交差点をグリッド名(例: A1グリッド)とした。
2. グリッドは、第1次調査で設置した基準杭(TB1)をE8杭とし、世界測地系に基づく座標北(G.N.)を南北方向の軸として設定した。
3. 文中では写真図版を「PL～」と指示した。
4. 本文中で掲載遺物に言及する際は数字を太字で示すか、()内に遺物番号を記した。

【遺構】

1. 遺構をSD(溝)、SK(土坑)、P(ピット)と区分した。
2. 遺構平面図の向きは図中の方位記号で示した。
3. 重複関係を示す「切る」「切られる」の用語は、新しい遺構が古い遺構を壊す場合は、新しい遺構が古い遺構を「切る」となり、古い遺構が新しい遺構に「切られる」となる。
4. 「掘方」は坑の形状を示す語で「台形」「弓形」などと表現した。「台形」は上に開く台形の意で使用した。底から立ちあがりにかけての箇所が丸味をもつ場合には「隅丸台形」とした。「弓形」は丸みのある底から屈折なく立ちあがる形態を指す。
5. 覆土には遺構に埋まった土の堆積状況を記した。覆土の色調はMunsell方式による「新版標準土色帖」に基づき記述した。可能な場合は大別層位を記した。
6. 遺構図の縮尺は40分の1とし、各図面にスケールを示した。

【遺物】

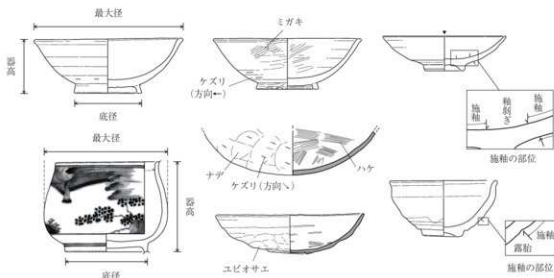
1. 出土遺物は全体に通し番号を付した。
2. 遺物は、素材や製法の違いから次のように分類した。[白磁][青磁][青花][染付][磁器][陶器][炆器][須恵器][土器][鉄器]
3. 個々の遺物の詳細は(遺物観察表)に記した。
4. 出土遺物は縮尺を3分の1とし図面にスケールを示した。
5. 反転復原した図面には図の中心に▼を記した。
6. 施軸の範囲を片羽矢印で示した(凡例図)。
7. 土器・陶磁器の部位は「外～」「内～」と指示した。口縁の内面が「内口縁」、胴部の内面が「内胴」など。

凡例図

【遺構】



【遺物】



本文目次

第Ⅰ章	調査の経緯・経過	1
第1節	遺跡の概要	1
第2節	調査の経緯と経過	1
第Ⅱ章	発掘調査	3
第1節	発掘調査の経過と内容	3
第2節	各調査坑の内容	5
第3節	検出遺構	10
第4節	出土遺物	11
第Ⅲ章	詰ノ段の調査成果について	15
参考・引用文献		15

挿図目次

第1図	朝倉城跡の位置	1
第2図	朝倉城跡と周辺の遺跡	2
第3図	調査坑の位置	3
第4図	T4・T5平面図・断面図	4
第5図	T5平面図・断面図	6
第6図	T4平面図・断面図	7
第7図	T6平面図・断面図	8
第8図	T7平面図・断面図	9
第9図	出土遺物	12

写真図版目次

写真図版1	調査前状況	19
写真図版2	調査坑設置状況	20
写真図版3	T4・T5完掘状況	21
写真図版4	T4完掘状況	22
写真図版5	T4土層断面	23
写真図版6	T5完掘状況	24
写真図版7	T5土層断面	25
写真図版8	T6、T6-P1	26
写真図版9	T7完掘状況	27
写真図版10	T7南壁土層断面	28
写真図版11	T7北壁土層断面	29
写真図版12	T7-P1	30
写真図版13	T7壁龕状の掘り込み	31
写真図版14	T7遺物出土状況	32
写真図版15	T7遺物出土状況	33
写真図版16	作業風景	34
写真図版17	作業風景	35
写真図版18	T4・T5出土遺物	36
写真図版19	T7・詰ノ段北斜面・二ノ段出土遺物	37

表目次

表1	出土遺物観察表	13
----	---------	----

第1章 調査の経緯・経過

第1節 遺跡の概要

朝倉城跡は、高知市朝倉城山に所在する戦国時代の山城である。城の規模が大きく、また大規模な土木工事を要した堅堀・横堀など諸施設が四方に配置されており、往事の拠点的城市であったことを窺わせる。県内では土佐七雄に数えられる本山氏が高知平野進出の拠点としたことで知られている。大永年間に本山茂宗が入城したといわれ、茂宗は天文年間に周囲の吉良氏、大高坂氏、大平氏らを次々と降し支配領域を拡げた。茂宗の死後、本山氏は勢力を増した長宗我部氏に圧迫され、永禄3年(1560)の長浜・戸の本合戦、永禄5年(1562)の朝倉合戦を経て朝倉城を放棄するにいたった。朝倉城は長宗我部氏の支配下に入り、「長宗我部地検帳」によれば家臣の十市宗桃の管轄となった。朝倉城跡は昭和28年1月に高知県史跡に指定されたことで堀や土塁など山城の構造物がよく保存されているが、現存する朝倉城跡の姿は長宗我部氏が手を加えたものと理解される。

朝倉城跡は高知平野の西端にあって、標高106mの丘陵上から眼下の平野を見おろす位置にある。朝倉城下は、城山や赤鬼山を西の境界とし、南北が鏡川と神田川に画される、自然地理的に完結した空間である。平野部では縄文時代から古墳時代にかけて柳田遺跡、鴨部遺跡、御手洗遺跡などが知られ、丘陵部では弥生時代の高地性集落として、朝倉城山遺跡や赤鬼山があり、古墳時代には丘陵の縁辺に朝倉古墳やウグルス古墳などが築造された。朝倉地域における人間活動がもっとも活発であったのは中世であり、朝倉城跡、鶴来築城跡、恵美城跡、神田旧城跡、神田南城跡が平野を取り囲むように位置する。城下では加治屋敷遺跡の他に包蔵地は認められないが、地名には「船戸」「古市」「倉」があり、今後城下町の都市機能が遺跡として発見されることが期待される。朝倉城跡は戦国時代に朝倉一帯を統べた要害であり都市空間の要となっていた。

第2節 調査の経緯と経過

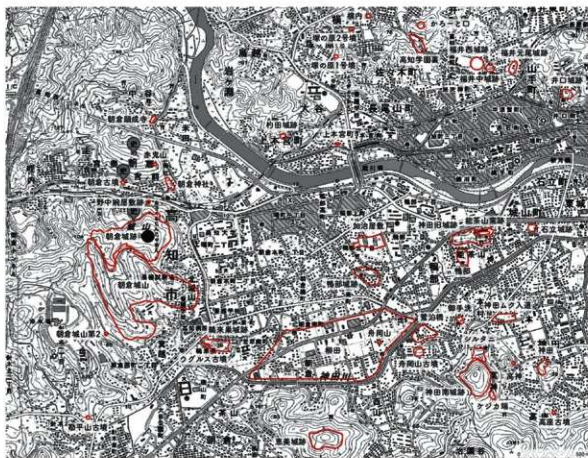
高知大学考古学研究室は2015年度より朝倉城跡の考古学調査に着手した。2015・16年度に実施した第1・2次調査についてはすでに「朝倉城跡Ⅰ」(高知大学考古学調査研究報告書第1集、2017年)で内容を報告した。詰ノ段における包含層・遺構の有無や遺存状況の確認を目的としたもので、本報告の第3次調査も同様の動機付けにより発掘調査を実施した。

第3次調査は2017年9月14日～24日の期間に実施した。対象区域を詰ノ段として、第1・2次調査のT1～T3につづく4つの調査坑(T4～T7)を設定し調査を実施した。経過は以下の通りである。

- 9.14(木) 現場設営。トータルステーションでグリッドポイントを設置。T4・T5・T6・T7の設定。降雨につき早めに切り上げる。
- 9.15(金) 光波測距儀でT4・T5を再設定。T7の設定、清掃。T4・T5の掘削開始。16・17日は台風の影響を考慮し作業中止。
- 9.18(月) T4・T5・T6・T7の調査。T4・T5は東西両壁のサブトレンチにおいて表土掘削。T6・T7では表土掘削。



第1図 朝倉城跡の位置



第2図 朝倉城跡と周辺の遺跡

9. 19(火) T4・T5・T6・T7の調査。T4・T5ではサブトレンチの掘削で塊石が露出。T6では地山が露出、ビット状の落ち込みを確認、掘削を終了し完掘写真を撮影。T7では切岸下端に腰状の凹みを確認。近代の筒形竈が完形で出土。
9. 20(水) T4・T5・T6・T7の調査。T4・T5では塊石とそれを覆うⅢ層を露出させる。サブトレンチではⅢ層を掘削。T6では平面図・断面図の作成。T7では地山面に段とビット状の凹みを確認、該当箇所から円礫と土器・坏皿が出土。FM高知の取材を受ける。
9. 21(木) T4・T5・T7の調査。T4ではサブトレンチでⅢ層から中世土器が出土、Ⅲ層下で地山を確認。T5では塊石の広がりを確認するため西側の50cm幅を拡張。T7では地山の傾斜と盛土による虎口空間の築造を確認。本山町教育委員会が来跡。NHKの取材を受ける。
9. 22(金) T4・T5の調査。T4ではサブトレンチでⅢ層を掘削し地山の傾斜を確認。T5ではⅢ層および塊石の検出。荒天により早めに撤収。
9. 23(土) 現地説明会を開催、参加者は33名。T4・T5・T7の調査。T4・T5では清掃をおこない完掘写真を撮影。平面図・土層断面図の作成。T7では中世の盛土層を確認、青磁片が出土。地山の変換点でビットを検出。掘削を終了し完掘写真を撮影。
9. 24(日) T4・T5・T7の調査。平面図・断面図の作成。
9. 25(月) T4・T5の調査。T4では平面図作成。T5では陶胎染付の出土位置確認作業。埋め戻し、撤収、器材等の清掃。

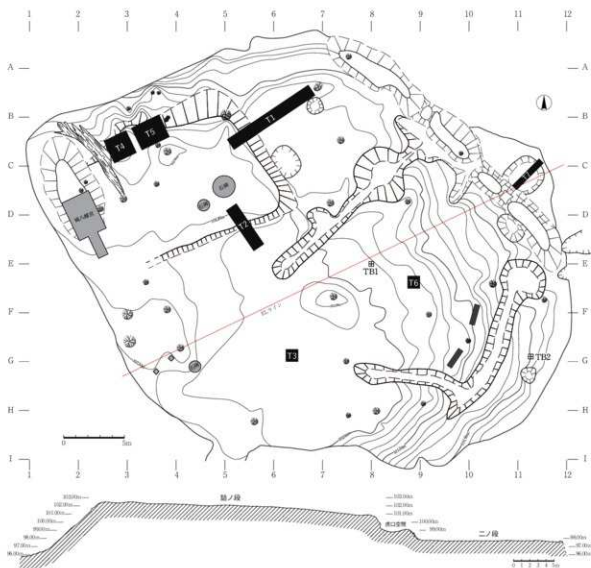
なお、本報告には2019年4月29・30日に実施した詰ノ段～二ノ段に対する測量調査の成果を含んでいる。

第Ⅱ章 発掘調査

第1節 発掘調査の経過と内容

(1) 発掘調査の概要

第3次調査では4つの調査坑を設定した。第1・2次調査のT1～T3につづけてT4～T7とし、あわせて11.55㎡を開放した(第3図)。T4・T5は詰ノ段北西部の槽台北斜面に設定した2×2mの調査坑である。T5は調査の過程で西側の幅50cm部分を拡張したため、2.5×2mの規模となった。第1・2次の測量調査で確認した槽台北斜面の突堤状微地形を対象に設定した。調査の結果、突堤状微地形は誤認であったが、槽台北斜面の全体に施された塊石と盛土による造成を確認することができた。T6は詰ノ段の東南平坦部に設置した1×1mの調査坑である。T3に對置するもので、詰ノ段平坦部の文化層や遺構の状態を確認するために設置した。堆積は浅く中世の包含層は認められなかったが、調査坑の西南隅でピットの一部を検出した。T7は詰ノ段北東切岸の中段に位置する虎口空間を対象に設定した3.1×0.5mの調査坑である。中世の造成と考えられる盛土やピットを検出し、土坑状の3m大の窟みが人為的に構築されたものであることを確認した。各調査坑から土器を中心に、青磁や青花など中世の遺物が出土した。



第3図 調査坑の位置

(2) 基本層序

第1・2次調査では、基本層序としてチャートの風化岩盤層の上に3つの土層を確認した。第Ⅰ層は草本が茂る表土層、第Ⅱ層は近代の暗褐色土層、第Ⅲ層は暗黄褐色土の山土(地山)をベースとする中世の盛土層である。第3次調査の各調査坑で確認した層序も準じて理解することができる。

T4・T5では表土層(第Ⅰ層)、近代層(第Ⅱ層)の下部に塊石を含む盛土層(第Ⅲ層)があり、地表下25～30cmで地山に達した。第Ⅰ層は厚さ3～6cmの腐葉土層である。第Ⅱ層は厚さ10cmの暗褐色土中に礫や炭化物を含み、相対的に多くの遺物が出土した。第Ⅲ層は厚さ20cmの山土を主体とする盛土層で塊石群を覆っていた。掘削範囲は僅かであるが若干量の中世土器が出土した。

T6では表土層(第Ⅰ層)、近代層(第Ⅱ層)下部の地表下20cmで地山に達した。第Ⅰ層は厚さ3～6cmの草本が茂る土層である。第Ⅱ層はにぶい黄褐色土層でよく締まり、粘性が強い。小石や炭化物を含む。

T7ではうすい表土層(第Ⅰ層)の下部に黄褐色土を中心とした近代層(第Ⅱ層相当)があり、西側では近代層下の地表下30cmで地山が露出した。地山が傾斜する東側では黄褐色土を中心とした盛土が厚く堆積する。第Ⅰ層は清掃時に除去されるほど薄い。第Ⅱ層は厚さ20～30cmで、色調等がことなる4つの層に区分され、さらに細分される。第Ⅲ層は土手上の構造をつくる盛土であり、大きく3つの層に区分され、さらに細分される。大別の3層は厚さ約20cmの土層がおよそ水平に堆積しており、人工的な盛土であると分かる。



第4図 T4・T5平面図・断面図

第2節 各調査坑の内容

(1) T4・T5の調査

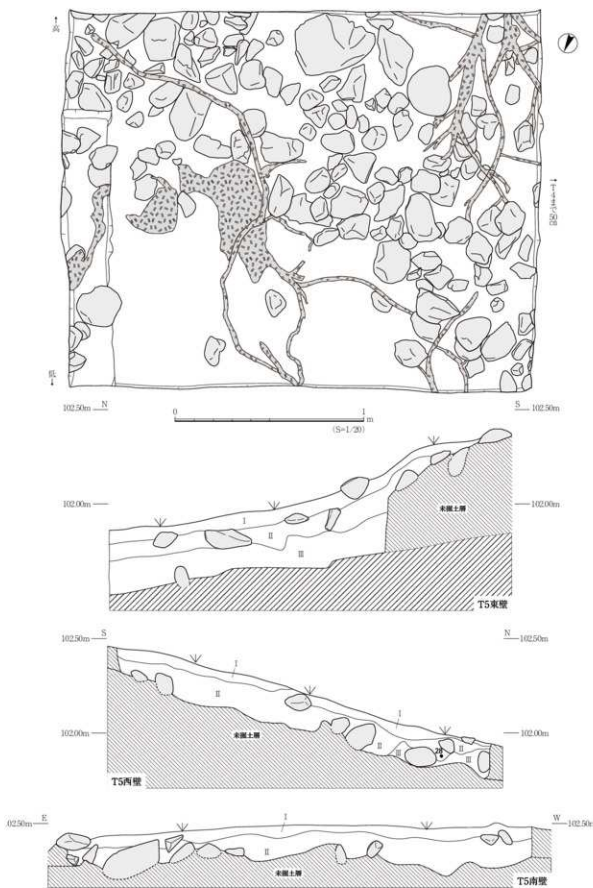
詰ノ段の北西部の槽台の北斜面にT4・T5を設定した。槽台は北東-南西方向に軸をとる平面長方形の台状の高まりで、長さ13m、幅9mの規模をもつ。軸方向は詰ノ段の北西辺に平行し、西側は現在城八輪宮の祠がのる土塁に画されている。T1・T2の調査で確認された地山上面の傾斜により、20~80cmの比高差をもつ台状部は自然地形を基にした施設と考えられる。T1の調査では槽台の裾を区画する溝を確認した。T2の調査で確認した近代の溝についても槽台を画した中世溝との関係が考慮される。槽台は人為的に整えられた構築物であると考えられ、現在地表面で確認される塊石が槽台に関わる部材であるかは調査を進める上での関心事ともなる。

槽台の構造を具体的に解明することは詰ノ段の構成を考えるための要点であるが、第1・2次の測量調査では槽台の北斜面で長さ2.1m、幅1.4mの突堤状の微地形を確認しており、槽台の重要構成要素である可能性を考えた。T4・T5はこの突堤状微地形の内容を確認するための調査坑である。突堤の付け根が確認できるよう、2×2mの調査坑を1mの間をおいて配置した。西側をT4、東側をT5とした(第4図)。T4の南西隅の座標はX = 60926.849m、Y = -1859.801m、T5の南東隅の座標はX = 60929.205m、Y = -1855.414mである。

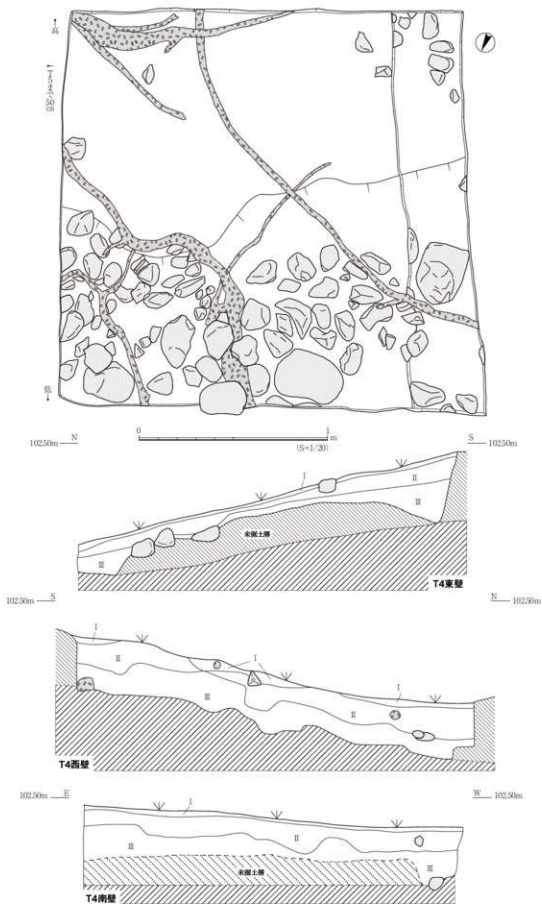
T4・T5の掘削はそれぞれ東西両壁沿いに設定した幅30cmのサブレンチを先行させつつ進めた。厚さ3~6cmの腐葉土からなる表土(第I層)を除去すると、下部には灰黄褐色土層(第II層)が堆積していた。第II層は近代のガラス片等を含む土層で締まりがなく粘性は低い。掘削を進めると、厚さ約10cmの第II層下部で20~30cm大の塊石が密集して現れた。T4・T5の全面で塊石群を露出させながらサブレンチの掘削を進め、塊石群がにぶい黄褐色土層(第III層)内に埋没していることを確認した。にぶい黄褐色土層である第III層は緻密で粘りが強くチャート起源の岩粒を含んでおり、当初地山の可能性を考慮したが、ブロック状に崩れ、内部に土器片を含むことから地山起源の盛土であると判断した。サブレンチで掘削を進め、厚さ約20cmの第III層の下部が地山であることを確認した。塊石のうち大振りなものは、地山上に置かれ第III層に覆われていた。T4・T5における掘削は第II層を除去した第III層および塊石の上面までとし、第III層の掘削(地山の確認)はサブレンチ(T4西壁沿い、T5東壁沿い)のみにとどめた。

槽台北斜面に密集する塊石は、大は人頭大、小は拳大の大きさで、大は地山上にあり、小は隙間の各所に置かれていた。地山を均した後、人頭大の塊石をおき、隙間に拳大の石を詰めながら、地山起源の土(第III層)で整地したと理解できる。塊石群は、T5では南側の斜面上部が中心、T4では北側の斜面下部を中心に分布していた(第4図)。T4・T5の連続性を確認するためにT5の西側を幅50cm拡張し、両者が一連のものであると判断した。すなわち槽台北斜面では塊石群をおいた斜面が東から西に向かって下っていた。この傾斜は、当初の突堤状構築物の存在を否定するものであった。T4では調査坑の中心に整地面の傾斜が変わる変換点を認めたが(第6図平面図、西壁)、地形測量でこの部分を突堤の西側部分と誤認したのであろうか。塊石の西側延長は今後の調査課題であるが、確認できた方向の先には西辺土塁の北端があり、槽台と土塁の関係について示唆的である。

T4・T5からは642点の遺物が出土した。T4が233点、T5が410点で相対的にT5が多い。内訳は土器564点、鉄器26点、陶磁器類9点、アルミ、ガラス、ビニール、プラスチック43点である。中世の資料を中心に30点を図示した(第9図)。中世遺物と判断できたものは509点(T4:137点、T5:372点)で、貿易陶磁2点(青花、白磁各1点)の他はすべて土器で、器種はほぼ坏皿に限定される。中世遺物の出土を層別別にみると、第I層が130点(いずれもT5)、第II層が356点(T4:129点、T5:227点)、第III層が23点(T4:8点、T5:15点)である。青花は第I層、白磁は第II層から出土した。中世遺物の多くは第II層から出土しており、第III層が大きく攪乱されたことを窺わせる。



第5図 T5平面図・断面図



第6図 T4平面図・断面図

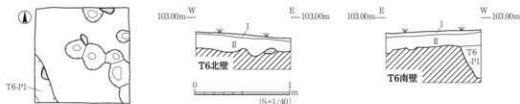
(2) T6の調査

詰ノ段南半部の広い平坦地において、西側の中心付近に設置したT3に対し、東側の中心付近に設置したのがT6である。平坦部について包含層および遺構の有無や状態を確認するための調査坑である。東辺が9ライン上にあり、調査坑の北東隅がE9杭の南1mに位置する。T6北東隅の座標はX=60917.114m、Y=-1835.600mである。

草本の茂る表土は薄く、5cmほど掘削するとにぶい黄褐色土の第Ⅱ層(近現代層)が露出した。第Ⅱ層は拳大の石を含み、5mm大の炭化物が混じていた。厚さ15cmほどの第Ⅱ層を除去すると下部には地山が露出した。厚さや層序はT3とほぼ同様である。

地山面では、径20～30cmの不整形の浅い窪みの連なりを確認したが、人為的な掘削の結果とは判断されない。地山面を検出する過程で、T6の南西隅にピット状の掘り込みの一部を確認し、これをT6-P1とした。T6-P1は深さ30cmで地山起源の土山が堆積し、覆土から中国製とみられる禾目軸の陶器碗の破片1点(31)があり中世の可能性はある。小片であり混入とも考えられるが、詰ノ段平坦部に中世の遺構が遺存する可能性を示す。

T6からはピットの資料を除き6点の遺物が出土した。第Ⅱ層からの出土であり、ガラス・プラスチック製品3点のほか、中世の土器・坏皿3点がある。



第7図 T6平面図・断面図

(3) T7の調査

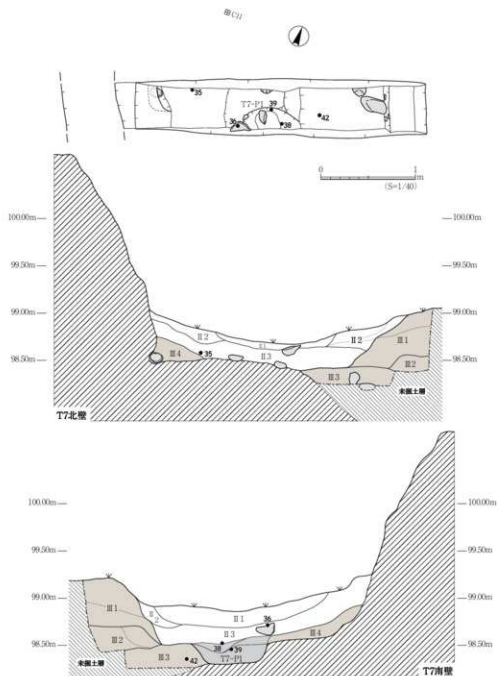
詰ノ段北東辺の土塁には中央付近に切れ目があり、直下の切岸中段部には平面略三角形のテラスが形成されている。規模は切岸に接する底辺が10.5m、奥行きが3.8mであり、詰ノ段との比高差2.1m、二ノ段との比高差1.3mである。虎口関連の構造物と考え、「虎口空間」と呼んでいる。虎口空間の中央には平面隅丸方形(2.9×2.8m)、深さ40cmの土坑状の落込みがあり、虎口空間に関わる施設であることが考慮された。T7は虎口空間および土坑状の落込みの構造を確認するために設定した調査坑である。当初は調査坑を十字方向に設定する計画であったが、調査体制とスケジュールを再検討し、北東軸の細長い調査坑のみを設置することとした。

T7は、切岸縁辺から土坑状落込みの上部までを対象に、落込みの中軸線を北西長辺として、長さ3.1m、幅0.5mの規模で設定した調査坑である。北西長辺東端の座標はX=60926.179m、Y=-1825.382m、西端の座標はX=60925.111m、Y=-1828.254mである。

掘削前の清掃で腐葉土主体の表土はほぼ除かれ、第Ⅱ層相当の土層より掘削を開始した。第Ⅱ層は土坑状の窪みを埋める灰黄褐色～鈍い黄褐色土層であり、掘削時には単一層としたが、土層断面において大きく3つの層に区分した。Ⅱ1層は黒褐色土の漸移層で、空き缶やプラスチック製品など現代遺物を含む。締まりがなく粘性も弱い。Ⅱ2層は上部の両端に堆積する灰黄褐色層である。Ⅱ3層は第Ⅱ層の主体をなす鈍い黄褐色土層で、拳大の礫を一定程度含む。Ⅱ2・3層は締まりがあり粘性も強い。切岸際の地山上に堆積するⅡ3層下の鈍い暗黄褐色土層を、調査時にはⅡ4層と区分したが、T7の中央付近で確認したT7-P1との関係を考慮し、整理段階で第Ⅲ層に変更した。第Ⅱ層は厚さ30cmで直下には地山層ないし第Ⅲ層が堆積する。

地皮下30～40cmで検出した地山は切岸裾から60cmまではおよそ水平であるが、60cm付近を変

換点として緩く傾斜し、120cm付近の変換点を経て、140cm付近で急傾斜となる。切岸裾から60～120cmの緩斜面は南側がやや低く窪んでいたが、結果として同箇所でもピット(T7-P1)を検出した。地山が急傾斜で下降する140cm付近から先は、鈍い明黄褐色土層が堆積し、土坑状の窪みの底面を延長するように水平面を形成していた。水平面を形成する鈍い明黄褐色土層の上部には、暗黄橙色土が60～75cmの厚さで堆積し、土坑状の窪みの東側立ち上りを形成していた。土坑状の窪みの底面と土手を形成する土層からは中世の土器、陶器、青磁が出土しており、中世の造成層と判断することができる。これら中世層である第Ⅲ層は4つに区分できる。Ⅲ1層、Ⅲ2層は土坑状窪みの立上り土手を形成する盛土層である。Ⅲ1層は暗黄橙色土の盛土層で締まりがあり粘性が強い。厚さは44～51cmである。色調差による上下層の区分が可能で、相対的に上層が暗く、下層が明るい。Ⅲ2層は暗黄橙色土の盛土層で締まりがあり粘性が強い。厚さは18～26cmである。やや粒子が粗く、1～2cm大の山土ブロックが少量混じる。中世の土器・陶器が出土した。緻密さによる分層が可能で、相対的



第8図 T7平面図・断面図

に内側が緻密で外側が粗い。Ⅲ 3層は土坑状の落ち込みの底面地山を延長する鈍い黄褐色土の盛土層で、よく締まっており粘性も強い。深さ20cmまでを掘削したが盛土はさらに下部に続く。地山土である風化チャートを主体とし、1～2mm大の木炭や焼土をわずかに含む。また20～30cm大の塊石が一定量含まれる。Ⅲ 3層からは中世土器や中国製の鉄軸陶器・青磁盤などが出土した。Ⅲ 4層は現地調査時にⅡ 4層とした鈍い暗黄褐色土層である。締まりがあって粘性が強く、地山土が混じる。Ⅱ 3層直下の地山上に堆積し、切岸裾に広がる。当初は第Ⅱ層の最下層としてT7-P1を覆うと理解したが、T7-P1上部にある20cm大の礫の上下に張り付いて出土した土器(36・37)は、ビット覆土上面で出土した土器(38・39)と周囲の土質を含めた出土状況がよく似ている。現地調査では礫の存在によりⅢ 4層とT7-P1の重複関係が十分に確認できなかったが、T7-P1がⅢ 4層を切って構築されたと考え方が整合的であるため、現地調査での理解を変更する。

T7では地山面にビット1基(T7-P1)と壁龕状の掘り込みを確認した。

T7-P1は切岸裾から60～120cm間にある緩斜面の南半部で検出された。平面は円形に近く、T7内で61×22cmまでを確認した。南壁の土層断面で確認した深さは27cmである。現地ではⅢ 3層を掘り込みⅡ 4層に覆われると理解したが、整理作業を通じて、Ⅲ 3層・Ⅲ 4層を掘り込みⅡ 3層に覆われると理解を改めた。T7-P1からは19点の中世土器・坏皿が出土した。

壁龕状の掘り込みはT7西端の切岸裾北半部で、地山面を底面として開口する。開口は高さが20cm、幅は28cmまでを確認し北長壁の調査区外にさらに延長する。奥行きは20cmで、奥に向かって約20度下降する。内部には15cm大の円礫が挿入されており、手前にも小石が接続していた。壁龕状の掘り込みはⅢ 4層に覆われており、掘り込み内の埋土もⅢ 4層と同質であった。T7-P1はⅢ 4層を掘り込み構築されたと理解するため、壁龕状の掘り込みはT7-P1に先行する。

T7からは82点の遺物が出土した。表採品にガラス瓶やビニール袋など6点があり、第Ⅱ層からプラスチック・ビニール・ガラス製品、染付、陶器などの近現代製品20点が出土した。Ⅲ 4層直上のⅡ 3層から統制陶器(35)が出土しており、第Ⅱ層の堆積が1940年代以降であると分かる。Ⅲ 4層は中世層であり、近世遺物を欠く第Ⅱ層は1940年代に土坑状の窪みを掘り返した後、堆積した土層と考えられる。中世遺物には56点があり、Ⅱ層出土の3点以外はすべて第Ⅲ層およびビットから出土した。中世遺物は青磁1点、陶器2点の他はいずれも土器・坏皿である。中世層出土の遺物は、Ⅲ 2層が20点、Ⅲ 3層が14点、T7-P1が19点である。いずれも細片で時期を限定することは困難であるが、Ⅲ 3層から青磁盤(42)が出土しており、T1を参照すると15世紀代の保有品である可能性が考慮される。

T7の調査結果によれば、虎口空間は(15世紀代に)地山を削り残して切岸と奥行き1.5mのテラスをつくり、テラスの傾斜部分にⅢ 3層を最上層とする盛土を施してテラス面を延長し、上部にⅢ 1・2層を盛土して土坑状の施設を構築した。虎口空間の二ノ段側崖面には表面に塊石が積まれており、Ⅲ 3層にも塊石が含まれる。壁龕状の掘り込みは盛土による虎口空間築造時に構築されたと考えられる。おそらくは時間をおかずⅢ 4層が堆積(盛土)しT7-P1が構築された。その後、1940年代以降に土坑状の窪みが再掘削され、第Ⅰ・Ⅱ層が40cm程度堆積し現在にいたる。

第3節 検出遺構

第3次調査ではビット2基を検出した。T6で1基(T6-P1)、T7で1基(T7-P1)である。T6-P1は中世の可能性のあるビット、T7-P1は中世のビットである。T7で検出した壁龕状の掘り込みについては、現状で遺構番号を付けず、T7の報告で内容を説明した。

(1) T6-P1

T6において第Ⅱ層を除去し地山を検出する過程で、調査坑の南西隅に遺構の掘方を確認した。全体の形状は不明であるが、ゆるく弧を描く一辺を長さ55cmにわたって確認した。調査坑内の奥行きはわずか20cmであるが、検出部分の覆土を掘削した結果、底の一部を確認することができた。掘り

込みの傾斜はきつく検出面から底までの深さは34cmであった。土坑規模の広がりをもつ可能性が高いが現状ではピットとした。覆土は1層で地山起源の山土が堆積していた。覆土からは陶器碗の破片が出土した。胎土に黒粒を含む中国製品の可能性をもつ褐釉陶器片で、栗色褐釉地に黒鉄釉が木目様に上掛けされる。詳細は不明であるが中世資料の可能性が考慮される。小片であるが詰ノ段平坦部に中世遺構が遺存する可能性を示唆する。

(2) T7-P1

切岸裾から60~120cmの緩斜面で検出したピットである。緩斜面部分の地山を検出する過程で、南半に錐鉢状に窪む箇所があり、遺物の出土頻度も高まったため、注意して掘削を進めた結果、緩斜面部に小さな(底部)平坦面と立上りを認め、ピットと認定した。T7で検出したのは北側の一部であるが、平面は円形ないし楕円形と考えられ、T7内で61×22cmまでを確認した。深さは南壁の土層断面によれば27cmである。底面は平坦で緩斜面の上下方向の立上りは緩やかであるが、北側の壁面は急傾斜をなす。覆土は単層で、Ⅲ3層ないしⅢ4層とよく似た鈍い明黄褐色土が堆積する。砂礫を含み粘性が強い。底面は相対的に小石が多く硬く締まっている。底面上では10cm大の礫を検出した。

現地調査では関係するⅡ4層(Ⅲ4層に変更)、Ⅲ3層との重複関係を見極めるのが困難で、Ⅲ3層を掘り込んで構築されⅡ4層とⅡ3層に覆われた、と考えた。ただし出土位置を記録した土器(36・38)は相対的に小石を多く含むピット覆土から出土した土器(39)と状況が類似しており、またⅡ4層(Ⅲ4層)とT7-P1の重複関係は、該当箇所15cm大の礫があったため詳細に観察することができなかった。それら状況を総合するとT7-P1はⅢ3層、Ⅲ4層を掘削し構築されたと理解するのが整合的である。これにより土器38はT7-P1の覆土最上面の出土となり、土器36を載せる礫もT7-P1に関連するものと理解される。

出土遺物には土器19点がある。いずれも土器・坏皿の細片である。土器36・37・38・39については出土位置を図示した。

第4節 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

第3次調査では表採を含め745点の遺物を収拾した。うち近現代の遺物は164点で土器・陶磁器のほか、プラスチック製品やガラス製品、金属製品がある。近世と認定したのはT5から出土した染付・陶胎染付の2点である。中世の遺物は571点があり、内訳は土器は563点、陶器3点、妬器1点、白磁2点、青花3点である。以下、中世の土器・陶磁器について内容を記す。

(2) 土器

土器は、坏皿427点、甕1点、鉢2点で、他に器種不明の胴部片139点が出土した。甕(27)、鉢(26・52)は小片であり器種の認定も確定ではない。

坏皿のうち全形を復元できたのはT7・Ⅱ3層の1点(36)のみであり、他は口縁片132点、胴部片182点、底部片94点である。口縁には形態差があり、端反りで口唇の先端が薄まるもの(1~3)、下位のナデにより口縁が肥厚気味で口唇が突り気味のもの(8・9・13~15・18)、口唇に直や斜めの面取りを施すもの(16・17・19)に区分できる。尖口唇内面(8・9)や口縁外面(18)に細線をめぐらすものもある。底部は、丸みをもって立ち上がるもの(5~7・10・11・20~24・38・39・48・49)と直線的に立ち上がるもの(36・50・51)に大別され、前者が多数を占める。内底はナデにより平滑となるものが多いが、轆轤目に起因する凹凸を残すもの(41・44~46・49~51)もある。底部の切り離し技法が確認できたものは多くが回転糸切であるが、ヘラ起し(49)の事例も認められる。胴部は内外をナデにより平滑に仕上げたものがほとんどであるが、轆轤目がつよく残るもの(25)がある。土器坏皿の形態差のうち、内面に強い轆轤目を残すものは16世紀代の新相となる可能性があるが、未だ体系の把握が十分でない。



第9図 出土遺物

(3) 貿易陶磁

青磁は龍泉窯の盤底部片1点(42)がある。見込に花文があり14世紀代の製品とみられる。同様の青磁盤は1次調査のT1中世盛土層(Ⅲa層)でも確認された。白磁片(53)も15世紀代とみられ、1・2次調査とあわせると詰ノ段では一定頻度で15世紀以前の製品が出土する。白磁には他に端反口縁の皿(29)があり、15世紀後半～16世紀前半に位置づけられる。青花は小野分類B1類にあたる端反口縁の皿(54～56)があり、密な唐草文・アラベスク文様(54)や十字花文(56)が施文される。15世紀後半～16世紀前半に位置づけられるが、54は相対的に古相を示す。陶器には中国製とみられる鉄軸製品2点がある(31・43)。いずれも栗色褐釉を地とし、黒鉄軸が上掛けされる。43の胎土が黒みをおび、31の胎土には黒粒が混じる。いずれも器種は不詳である。

表1 出土遺物観察表

No.	出土位置	遺物種別・部位等	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	①色調・釉薬 ②素材 ③装飾 ④造形 ⑤使用痕 ⑥その他	産地 時期
1	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	24+	—	—	①鈍橙。②赤白角岩微粒。③尖口唇。内外ナデ。	在地
2	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	17+	—	—	①橙。内口縁白色。焼締り。②精選土。黒粒。③尖口唇。内外精ナデ。	在地
3	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	16+	—	—	①鈍橙。焼締り。②精選土。角岩微粒。③尖口唇。内外精ナデ。	在地
4	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	1.6+	—	—	①鈍黄褐。焼締り。②精選土。赤黒微粒。③丸口唇。内外精ナデ。	在地
5	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:底	10+	—	—	①鈍黄橙。焼締り。②精選土。③内底ナデ。回転糸切後ナデ。④焼成後穿孔。	在地
6	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:底	12+	—	—	①鈍橙。焼締り。②精選土。③内底ナデ。回転糸切。	在地
7	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:底	12+	—	—	①鈍黄橙。焼締り。②精選土。黒粒。③内外ナデ。割壊れ。	在地
8	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	17+	—	—	①鈍橙。焼締り。②精選土。③尖口唇。薄段。	在地
9	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	16+	—	—	①鈍黄橙。焼締り。②精選土。③尖口唇。微線段。内外精ナデ。	在地
10	T4 Ⅰ層	土器 坏皿:底	13+	—	7.5▼	①鈍黄橙。②精選土。黒粒。③内外ナデ。回転糸切ナデ。外底面溝状。	在地
11	T4 Ⅱ層	土器 坏皿:底	15+	—	6.8▼	①鈍黄橙。②精選土。黒粒。③内外ナデ。回転糸切。	在地
12	T4 Ⅰ層	垢器 壺:胴	26+	—	—	①灰黄褐。②泥土。石英・雲母。③外細ハケ。内板ナデ。	甕前
13	T5 Ⅰ層	土器 坏皿:底	22+	—	—	①鈍橙。②精選土。黒粒。③口縁稍肥厚。内外ナデ。	在地
14	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	23+	—	—	①橙。②精選土。黒粒。③尖口唇。微線段。口縁微肥厚。内外ナデ。	在地
15	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	21+	—	—	①鈍黄橙。焼締り。②精選土。黒粒。③尖口唇。微七面。内外ナデ。	在地
16	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	23+	—	—	①鈍橙。焼締り。②精選土。黒粒。③口唇斜面取り。内外ナデ凸凸。	在地
17	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	26+	—	—	①鈍橙。②精選土。赤粒・黒角岩微粒。③口唇面取り。内外粗ナデ。	在地
18	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	10+	—	—	①鈍黄褐。焼締り。②精選土。③尖口唇。外底面細。内外精ナデ。	在地
19	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:口縁	19+	—	—	①橙。焼締り。②精選土。赤粒。③口唇斜面取り。内外ナデ。	在地
20	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:底	10+	—	—	①鈍黄橙。②精選土。黒粒。③内外ナデ。回転糸切ナデ。	在地
21	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:底	09+	—	—	①鈍橙。焼締り。②精選土。③内底ナデ。回転糸切ナデ。	在地
22	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:底	09+	—	—	①鈍黄橙。焼締り。②小窪。黒粒。③底丸み。内外ナデ。	在地
23	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:底	1.1+	—	4.8▼	①橙。焼締り。②精選土。黒粒。④薄手。外回転ナデ。回転糸切。	在地
24	T5 Ⅱ層	土器 坏皿:底	1.4+	—	6.0▼	①鈍黄橙。焼締り。②精選土。③胴張り。内外ナデ。回転糸切。	在地

No.	出土位置	素材区分 器種・部位等	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	①色調・輪帯 ②素材 ③装飾 ④造形 ⑤使用痕 ⑥その他	産地 時期
25	T5 Ⅱ層	土器 坏皿：胴	31+	—	—	①橙、②精選土、赤粒、③内面強輪轆目ナデ。	在地 16世紀
26	T5 Ⅱ層	土器 鉢々：口縁	17+	—	—	①純黄橙、焼締り、②精選土、③口唇二面取り、上面に寛網紋、内外ナデ。	在地
27	T5 Ⅰ層	土器 妻・頸部	36+	—	—	①褐、②砂質、角岩・雲母微粒、軟質、③縦口縁、内外ナデ、④外底。	在地々
28	T5 Ⅱ層	陶胎染付 瓶：口頸	95+	—	—	①淡黄化粧土、透明釉、③明に圈線、花草草々。	近世以降
29	T5 Ⅱ層	白磁 皿：口縁	20+	—	—	①虫喰い、③端反、⑥小野白磁皿C群。	中国 16世紀
30	T5 Ⅱ層	陶器 碗：口縁	13+	—	—	①淡黄、虫喰い、④丸口唇。	瀬戸々
31	T6-P1	陶器 碗々：胴	15+	—	—	①栗色釉地に黒陽輪軸目、②黒粒を含む。	中国々
32	T7 Ⅰ層	ガラス 瓶：定形	19.3	5.0	5.0	①無色透明、③頸に穀粒文帯、胴上下に7mm間隔の縦溝列、括れに「National Drinks/NET 180 cc」陽刻、外底は○内に「K」、④合范跡、底刻C。	
33	T7 Ⅰ層	ガラス 瓶：定形	14.1	5.2	5.2	①無色透明、③「コーヒー-紅茶にミルク/乳/明治牛乳」[Meiji/MILK/VITA_印]、「K」○内N24、「○内正 180cc」[8 11]陽刻、④横断面方形。	昭和29年頃
34	T7 Ⅰ層	染付 小碗：胴底	26+	6.1	3.1	①置付輪軸、内面焙着痕、内面輪軸、③外側に山水文。	近代以降
35	T7 Ⅱ3層	絞網陶器 筒形碗：略定形	5.3	6.5	6.4	①長石釉、内面・裾回り露胎、③外底に「敷35」陽刻、④口唇切断面、上げ底。	美濃焼 1940年代
36	T7 Ⅱ3層	土器 坏皿：口・底	1.9	8.6	7.0	①橙、②精選土、④内外ナデ、回転糸切ナデ、⑤全面磨滅、⑥T7-No.2、T7-P1覆土上の石の上。	在地
37	T7 Ⅱ3層	土器 坏皿：底	0.5+	—	—	①橙、②精選土、⑤強磨滅、⑥T7-No.2(36)の直下。	在地
38	T7 Ⅱ3層	土器 坏皿：胴底	1.7+	—	6.2	①橙、②精選土、底中央に1cmの角岩窪、④内外ナデ、⑤強磨滅、⑥底部の破片と図示部分は接合せず、T7-No.4、T7-P1覆土の直上。	在地
39	T7-P1	土器 坏皿：底	0.7+	—	6.2	①橙、②精選土、黒白角岩微粒、④内外ナデ、回転糸切ナデ々、⑤磨滅、⑥T7-P1覆土最上層。	在地
40	T7-P1	土器 坏皿：底	0.5+	—	—	①橙、②精選土、④内外ナデ、⑤磨滅。	在地
41	T7-P1	土器 坏皿：底	0.6+	—	7.6	①橙、②精選土、④内底ナデ凹凸、回転糸切ナデ、⑤磨滅。	在地
42	T7 Ⅱ3層	青磁 盤：底	0.9+	—	—	①碧緑釉、内外施釉、③内底に捺刻花文。	龍泉窯 14世紀
43	T7 Ⅱ3層	陶器 茶入々：胴	31+	—	—	①栗色釉地に黒陽輪軸掛け、②灰黒色土。	中国々
44	T7 Ⅱ3層	土器 坏皿：底	0.9+	—	—	①純橙、②精選土、角岩微粒、④内底ナデ凹凸、⑤強磨滅。	在地
45	T7 Ⅱ3層	土器 坏皿：底	0.9+	—	—	①橙、②精選土、角岩微粒、④内底ナデ凹凸、⑤強磨滅。	在地
46	T7 Ⅱ3層	土器 坏皿：底	0.6+	—	7.6	①橙、②精選土、④内底ナデ凹凸、⑤強磨滅。	在地
47	T7 Ⅱ3層	土器 坏皿：底	0.9+	—	4.8	①純黄橙、②精選土、角岩微粒、砂質、④内外ナデ、⑤磨滅。	在地
48	話ノ段 北斜面	土器 坏皿：胴底	1.3+	—	3.5	①橙、②精選土、黒粒、④内輪轆目ナデ消し、外ナデ、⑤磨滅。	在地
49	話ノ段 北斜面	土器 坏皿：底	0.6+	—	6.0	①橙、②精選土、黒粒、④内底ナデ凹凸、ヘラ起し。	在地
50	話ノ段 北斜面	土器 坏皿：胴底	1.4+	—	7.4	①純黄橙、②精選土、黒粒、④内底ナデ凹凸、⑤磨滅。	在地
51	話ノ段 北斜面	土器 坏皿：胴底	1.0+	—	6.8	①純黄橙、②精選土、黒・赤粒、④内底ナデ凹凸、外底施ナデ、裾小捲れ。	在地
52	話ノ段 北斜面	土器 壺々：底	24+	—	—	①橙、②緻密、黒粒・角岩、④内外ナデ、⑤磨滅。	在地
53	話ノ段 北斜面	白磁 皿：口縁	1.4+	—	—	⑥小野白磁皿B群。	中国 15世紀
54	話ノ段 北斜面	青花 皿：口縁	31+	—	—	③内口に二圈線、アラバスタ文様、外口に二圈線、密な書草文、④端反、⑥小野青花皿B1群。	中国 15-16世紀
55	話ノ段 北斜面	青花 皿：口縁	1.8+	—	—	③内口に圈線、外口に二圈線、草花文、④端反、⑥小野青花皿B1群。	中国 15-16世紀
56	二ノ段	青花 皿：底	1.4+	—	—	①置付輪軸、高台隆に砂付着、③高台隆圈線、外側に有文、足込に十字花卉文、⑥小野青花皿B1群。	中国 15-16世紀

第三章 詰ノ段の調査成果について

第3次調査で詰ノ段の調査は一区切りとなるため、第1・2次調査の成果とあわせ、詰ノ段についての調査成果を総括する。

詰ノ段は40×30m規模の平面が歪な五角形を呈する、朝倉城跡最頂部の曲輪である。平坦部の標高は100.2～100.8mで、原地形にしたがって傾斜する東側が1.6m低い。詰ノ段は方形台状の槽台のある北区域と平坦部がひろがる南区域に区分され、空間の構成や利用法の違いが調査の課題となる。第1～3次調査において設定した7つの調査坑は、槽台縁辺部の4箇所(T1・T2・T4・T5)、南区域平坦部の2箇所(T3・T6)、東縁下段虎口空間の1箇所(T7)である。

槽台はT1およびT4・T5の成果によれば、自然地形の高まりを整形し構築したものである。方台形の形状は盛土(Ⅲ層)による造作である。T1では槽台上面を整地した盛土の痕跡を確認した。また東側下面も盛土で広く整地しており、盛土を掘削し構築された溝(SD1)が槽台の東裾を直線的に区画していた。T4・T5では、傾斜する地山上に敷き並べた塊石を土台とする盛土層を確認した。槽台平坦面を北側に拡張するための造作と考えられ、上面でも一定範囲に盛土層が検出されるであろう。また槽台の東下方の平坦部では、盛土層下の地山で遺構(SK2)を確認しており、(SD1をとまなう)槽台造成に先行する施設群の遺存が期待できる。

南区域平坦部では西側のT3、東側のT6のいずれでも地表下10～20cmで地山に達し、中世包含層の遺存は認められなかった。ただしT6では地山を30cm以上掘り込んだピット(T6-P1)が確認され、小片ではあるが中世と思しき遺物を含むため、南区域でも地山上で中世遺構が遺存する可能性がある。

東縁下段の虎口空間は、詰ノ段の下位2.1m、二ノ段との比高差1.3mのテラス状の突出部で、平面形は略三角形、切岸側の底辺が10.5m、奥行きが3.8mの規模である。中央付近に3m大で深さ40cmの土坑状の落込みがある。T7の成果によれば、テラス状の突出部自体が切土と盛土による中世の構築物であり、土坑状の落込みも盛土により立ち上がり部を造成し構築したものであった。落込み中央部にはピット(T7-P1)があり、何らかの建物があったと予想される。

槽台や虎口空間を造成した盛土中からは少量ではあるが遺物が出土している。多くを占める土器は細片でもあり時期の比定が困難であるが、青磁や白磁など貿易陶磁には15世紀以前に遡上するものがある。伝世を考慮しなければならないが、現状で確認される城跡の構造が築城当初の構成を基礎とした可能性が考慮され、出土遺物の検討とともに発掘調査を継続する必要がある。

参考・引用文献

- 上田秀夫、1982、「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号、日本貿易陶磁研究会、55～70頁
- 小野正敏、1982、「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号、日本貿易陶磁研究会、71～87頁
- 柴田圭子、2001、「16世紀中葉の輸入陶磁器の再評価—中国・四国地方の遺跡を中心に—」『中世土器研究論集』、中世土器研究会、111～122頁
- 宮里修編、2017、「朝倉城跡Ⅰ—第1・2次調査報告書—」高知大学考古学調査研究報告書第1集、高知大学人文社会科学部考古学研究室・高知市
- 森田勉、1982、「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号、日本貿易陶磁研究会、47～54頁

報告書抄録

ふりがな		あさくらじょうせき						
書名		朝倉城跡Ⅱ						
副書名		第3次調査報告書						
シリーズ名		高知大学考古学調査研究報告書						
シリーズ番号		第2集						
編著者名		宮里 修						
編集機関		高知大学人文社会科学部考古学研究室						
発行機関		高知大学人文社会科学部考古学研究室						
所在地		高知県高知市曙町2丁目5番1号						
発行年月日		2022年11月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あさくらじょうせき 朝倉城跡	〒780-8064 高知県 高知市 朝倉城山丁 109・110・141番地	39201	010005	33° 32′ 57″	133° 28′ 48″	2017. 9. 14 ～ 2017. 9. 24	11.55㎡	学術調査
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
朝倉城跡	城館跡	中世 近代	ピット		2基 白磁 青花 土器 陶磁器			
要 約	槽台では塊石を用いた中世の斜面造成を確認した。平坦部の地山を掘り込み構築されたピットが中世の遺構である可能性がある。虎口空間では土坑状の落込みが中世の盛土造成の結果であることを確認した。							

写真図版



写真1 調査前状況(T6、北西から)



写真2 調査前状況(T4・T5、東から)



写真3 調査前状況(T7、北から)



写真4 T5設置状況(北から)



写真5 T4設置状況(北から)



写真6 T6設置状況(北から)



写真7 T7設置状況(西から)



写真8 T4・T5表土掘削状況(東から)



写真9 T6表土掘削状況(南から)



写真10 T7設置作業(南から)



写真11 T7掘削状況(北から)



写真12 T4(奥)・T5(手前)完掘状況(東から)



写真13 T4(手前)・T5(奥)完掘状況(西から)



写真14 T4完掘状況(北から)



写真15 T4完掘状況(南から)



写真16 T4南壁土層断面(北から)



写真17 T4北壁土層断面(南から)



写真18 T4西壁土層断面(東から)



写真19 T4サブレンチ南壁土層断面(北から)



写真20 T4北西隅状況(南東から)



写真21 T5完掘状況(北から)



写真22 T5完掘状況(南から)



写真23 T5南壁土層断面(中央付近、北から)



写真24 T5北壁土層断面(南西から)



写真25 T5東壁土層断面(西から)



写真26 T5サブトレンチ完掘状況(北から)



写真27 T5西壁土層断面(北東から)



写真28 T5西壁付近陶胎染付出土状況(東から)



写真29 T6完掘状況(北から)



写真30 T6西壁土層断面(東から)



写真31 T6東壁土層断面(西から)



写真32 T6北壁土層断面(南から)



写真33 T6-P1土層断面(北から)



写真34 T7完掘状況(西から)



写真35 T7完掘状況(東から)



写真36 T7南壁土層断面(北から)



写真37 T7南壁土層断面(西側、北から)



写真38 T7南壁土層断面(東側、北から)



写真39 T7北壁土層断面(南から)



写真40 T7北壁土層断面(中央付近、南から)



写真41 T7北壁土層断面(西側、南から)



写真42 T7-P1完掘状況(北から)



写真43 T7-P1完掘状況(東から)



写真44 T7壁龕状の掘り込み(南東から)



写真45 T7壁龕状の掘り込み(東から)



写真46 T7遺物出土状況(東から)



写真47 T7遺物出土状況(西から)



写真48 T7 統制陶器(35)出土状況(東から)



写真49 T7 中世土器(36)出土状況(北から)



写真50 T7 中世土器(38・39)出土状況(北から)



写真51 T7 中世土器(38)出土状況(北から)



写真52 T7 青磁(42)出土状況(北西から)



写真53 T7 青磁(42)出土状況(北から)



写真54 T7 中世土器(38)掘削状況(南西から)



写真55 T7 中世土器(38)掘削状況(西から)



写真56 作業風景(T4・T5、南東から)



写真57 作業風景(T5、北から)



写真58 作業風景(T6、北から)



写真59 ミーティング風景(T7、北から)



写真60 作業風景(T4、北西から)



写真61 作業風景(T5、北東から)



写真62 作業風景(T4、北東から)



写真63 作業風景(T7、西から)



写真64 FM高知取材状況



写真65 NHK高知取材状況



写真66 現地説明会(T4・T5、東から)



写真67 現地説明会(T6、北西から)



写真68 埋め戻し作業(T5、南から)



写真69 埋め戻し後状況(T4・T5、東から)



写真70 埋め戻し後状況(T7、北から)



写真71 第3次調査参加者



T4・T5 出土遺物



T7・詰ノ段北斜面・二ノ段出土遺物

高知大学考古学調査研究報告書第2集

朝倉城跡Ⅱ

— 第3次調査報告書 —

2022（令和4）年11月30日

編集 高知大学人文社会科学部考古学研究室

発行 高知大学人文社会科学部考古学研究室

高知市曙町2丁目15番1号

電話 088-844-8211

印刷 株式会社飛鳥